

# 学 報

Kobe College Bulletin

2025年 神戸女学院  
創立150周年

150<sup>th</sup>  
Bridging Generations

ISSN0389-164X

NO. 193

2021.12.17  
神戸女学院  
学報委員会

## 私たちに希望はある

中高部長 森谷 典史

コロナ対策に追われるように過ごした2021年ですが、ようやく（この原稿を書いている時点で）収束するかのようになり、1日の国内の感染者数が100人を切る数字となってきました。神戸女学院でおこなわれた職域接種においては、卒業生の医療従事者で構成する「KC メディカル」の方々の協力のもと、中高部では約4割の生徒が学内でワクチン接種を受けることができ、大学生や地域の方々を含めると4,079回の接種をおこなうことができました。特に地域の方々には喜んでいただき、学院として地域に対する1つの貢献ができたのではないかと感じています。

また、10月22日より学院の危機管理レベルが「1」となったことを受け、中高部では小学6年生および5年生以下へのキャンパス見学会を11月6日、23日の2回にわたり実施することができました。約700組の小学生・保護者の皆様を学校にお迎えし、学校の説明会、校舎の見学会を実施することができました。学外での学校説明会で、学校見学に行きたいというご意見をたくさんいただきましたので、直接来校いただき、見学をしていただけたことをとても嬉しく感じています。

説明会では、米国伝道会より2名の女性宣教師として派遣された、イライザ・タルカット先生と、ジュリア・ダッドレー先生が、神戸花隈で私塾を開校し、1875年に神戸山本通に「女学校」を設立したことがはじまりです、という沿革から始まり、建学の理念・教育方針はキリスト教主義教育、国際理解の精神ということを伝え、毎朝の礼拝についての説明をします。（以下こんなことを話しています）

礼拝では暗唱聖句、讃美歌、聖書、奨励、お祈り



がおこなわれますが、奨励、つまりその日のお話を担当される方は、皆よく考え、整ったお話をしてください。自治会や委員会の長の方々、各行事のリーダーの方々、また、賞を受賞した方々や、卒業生などが、それぞれ自分が経験したことや、今考えていることを話してくれます。私たちはお話ししてくれる方の経験や感じたことを聞くことで、私たちもその人の経験を共有することができます。年間約180人の方のお話を聞き、自分も考え、経験するというを毎日毎日繰り返していくのです。

話し手が語る楽しいと感じること、辛いと感じることを通して、私たちはなぜ生きるのか、なぜ学ぶ

のかをそれぞれに考え、自分なりの答えを見つけていきます。うまくいく話ばかりではありません。悩み苦しんだ中から、どのように希望を見つけたかを、または、見つけ出そうとしているか、ということを書いてくれます。それを聞き、私たちも同じように、苦しんだり悩んだりしたことを思い出しながら、神さまは、そこにどんな意味を持たせようとしているのか、どんなことに気が付いてほしいと考えておられるのかなどを考えながら、同じように悩み苦しみながら、希望を見つけ、自分の目標、あるいはミッションと感じられるものを見つけて出そうとします。わたしたちは毎日毎日、自分が生きていくための意味を見つけたり、作り出したりしているのだと考えさせられます。

このような礼拝での語りが、毎年毎年先輩から後輩へ受け継がれていきます。神戸女学院で礼拝をまもったことがある人は、思い返したときどんなことを思い出すのでしょうか。

学校説明会の日に、説明会に参加されていた卒業生にお会いしました。礼拝のことで何か覚えてますかと聞くと、讚美歌を歌ったこと、自分が礼拝当番で奨励をしたことを覚えている、と言っていました。時間がたつと、人はその当時何を考えていたのかや、何を悩んでいたのかということは忘れてしまうものです。しかし、講堂に皆が集まり、讚美歌を歌ったこと、奨励をしたり、聞いたりしたということは覚えているものです。時間や空間を共有し過ごしたという事実が、私たちが生きるための糧となっていることは間違いがないことだと思います。

私たちは生きていくと、理由はわからないけれど、とてつもなく息苦しくなることがあります。そんな時でも、毎日毎日繰り返される礼拝を守ることによって心が軽くなり、自分が悩むのではなく、悩んでいる人を助けるために自分がどうすべきか、という立場に変えられていきます。苦しいと感じていたことも希望に変えられていくということを体験することができます。後になって、誰のどんなお話だったのかも思い出せませんが、自分自身の中で、何かが変えられていくという経験をするのだと思います。

中高部長になり、毎朝の礼拝の意味について改めて考えさせられ、この学院にとって毎朝の礼拝はとても大切で、守っていかなければいけないのだと、学校説明会などでお話をするたびに感じさせられています。

また、11月10日には今年初めての授業参観日を実施することができました。たくさんの方が押し寄せて、密になったらどうしようかと考えていましたが、保護者の皆さんもうまく分散し、適度な距離を保っていてくれたため、問題はなかったと感じています。特にJ1の保護者の皆さんは、4月以来の来校でクラス懇談会を持っていただき、またJ3では、進路説明会などを持っていただきました。他の学年は、密を避けるために別の日に学年懇談会を設定していただきました。一つ一つと、学校行事が元の形に戻りつつあることが感じられ、とてもうれしく感じています。

11月8日～12日の宗教強調週間中に、放課後プログラムとして、リオデジャネイロに続き東京オリンピックに自転車競技大会で出場した那嶺恵理さんを迎え、後輩たちとの話し合いの場がもたれました。生徒からの「自転車競技を仕事とすることに不安はなかったのですか」という質問に、「神戸女学院では、中高生のときから自由に自分がしたいことをしてきました。自分がしたいと思うことに向かって取り組む性格なので、失敗したらとかいう考えはあまり持っていませんでした。できなかったらまた挑戦するだけです。ただ、スポンサーがついて、お金の心配をすることがないようになるまでは不安でした。次の目標は、ヨーロッパの自転車競技の大会で表彰台に立つことです。神戸女学院は、自分がしたいと思うことに自由に取り組むことができる学校です。そういう自由を中高生時代に経験することがあったから、今の自分があるのだと思います。」と後輩たちにメッセージをくれました。いいお話をしてくれたことに感謝しています。

彼女の話聞きながら、こうしようという目標を持ち、固定観念に縛られずに自由に発想する力があれば、私たちにできないことはないのだと感じさせられました。きっと生徒の皆さんも、自分自身の可能性に気づき、いろいろなことをもう一度考えることができたと思います。神戸女学院も、大きな目標を持ち、神様からの導きを信じ、希望をもって進むことで、より素晴らしい学校となっていくのだと信じています。どうか、この文章をお読みの皆さま、どんな形のものでも構いませんので、神戸女学院への応援、サポートをいただければ、私たちも不安なく取り組むことができると考えています。よろしくお願いたします。

## KCCだより

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (Kobe College Corporation) は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のため設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体 (NPO) です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のためにさまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援をおこない、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCCはその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回は、KCC-JEE 理事でもあられた、ロックフォード大学学長 Eric W. Fulcomer 氏が寄稿してくださいました。]

### Kobe College and Rockford University

Eric W. Fulcomer

Kobe College of Japan and Rockford University of the United States share a long history. Kobe College —first established as Kobe Home— was founded in Kobe, Hyogo, Japan by American missionaries Julia Dudley and Eliza Talcott on October 12, 1875. It was one of the oldest educational institutions for women in western Japan.

Dudley had connection to Rockford University (formerly Rockford Female Seminary). She attended the Seminary in 1856–1857 as a part of the Preparatory Class (similar to an American high school curriculum). She arrived in the country under the appointment of the American Board of Commissioners for Foreign Missions in 1873 with Talcott. The women were some of the first female missionaries to Japan.

In 1891, Kobe began offering a three-year curriculum in higher education for women, and in 1894 —two years after Rockford Female Seminary became known as Rockford College— the institution's name changed to Kobe College.

On November 22, 1920, the Kobe College Corporation was founded under the State of Illinois to support the growing institution. Its founding began the sister-college relationship with Rockford College at the suggestion of then-Rockford College president, William A. Maddox. A club, later known as the World Friendship Committee of the YWCA, was organized on campus to encourage relationships between institutions in America and those in international countries. Rockford College students raised \$631 as an initial gift for Kobe College by each pledging \$2.

Students from Kobe College and Rockford College were encouraged to spend time studying in each other's respective countries —a program that continues today. After WWII, Rockford College President Mary Ashby Cheek, who served on the board of the Kobe College Corporation, ensured there were always students from Kobe College studying at the Rockford College campus. She also encouraged students from Rockford College to study at Kobe. One such student was Ann Belknap Benner, Class of 1940, who came to Japan as exchange student from Friends of Kobe (KCC Exchange Program founded 1930) and taught at Kobe College upon her graduation from Rockford College. The exchange program remains in place today, with the institutions continuing to host students from its sister school. Within the last 11 years, Rockford University has sent three students to study at Kobe College, and 11 Kobe students have studied at Rockford.

Now more than 100 years old, the Kobe College Corporation remains in existence today with Rockford University presidents —including current President Eric W. Fulcomer, and his predecessor, Robert Head, —having both served terms on its board. Most recently, Rockford University's Director of Global Affairs Maria Diemer was appointed to the board.

## 神戸女学院とロックフォード大学

Eric W. Fulcomer

日本にある神戸女学院と米国のロックフォード大学とは、長い歴史を分かち合ってきました。

通称神戸ホームとして最初に設立された神戸女学院は、American Missionaries の宣教師 Julia Dudley 女史、Eliza Talcott 女史によって、1875年10月12日に神戸に開校されました。これは西日本最古の学校のひとつでした。

Dudley 女史は、ロックフォード大学（旧 ロックフォード女子専門学校）と繋がりがありました。彼女は、現在の米国高等学校のカリキュラムに似た大学進学予備校のクラスに1856年から1857年の間、在籍していました。日本への最初の女性宣教師として、Talcott 女史と共に海外伝道の為 American Board of Commissioner から命を受け1873年に日本へ着任しました。

1891年、神戸女学院は、女性の為のより高等教育として三年制高等科（カレッジ課程）を設立、ロックフォード女子専門学校からロックフォード大学へ変わった2年後1894年には、この教育機関は、「神戸女学院—Kobe College」へと改称しました。

1920年11月22日、Kobe College Corporation は、神戸女学院の発展を助けるためイリノイ州にて設立されました。のちにロックフォード大学学長となった William A. Maddox 氏の推薦の下、姉妹校として寄付金集めが始まりました。YWCA World Friendship Committee 「基督教女子青年会万国友愛委員会」として知られているクラブは、アメリカとその他海外の国々との交流を助けるために校内に設立されました。ロックフォード大学の学生たちは、それぞれが2ドルから神戸女学院への最初のギフトとして631ドルを集めました。

神戸女学院とロックフォード大学では、お互いの国での留学プログラムを進めてきており、現在もプログラムは続いています。第二次世界大戦後、ロックフォード大学学長 Mary Ashby Cheek 女史は、KCCでの理事も務め、ロックフォード大学への神戸女学院からの留学生をいつでも受け入れることを確約しました。そして、ロックフォード大学の学生

が神戸で留学することを推奨しました。1940年クラス生だった Ann Belknap Benner は、ロックフォード大学を卒業後、Friends of Kobe (KCC 内に1930年に作られた日米親善のための組織) の交換留学生として来院。神戸女学院でも教鞭を取りました。交換留学プログラムは、姉妹校からの留学生をホストファミリーとして受け入れることも含め、現在も続いています。過去11年の間に、ロックフォード大学は、神戸女学院へ3名の学生を送り出し、神戸女学院からは、11名の学生がロックフォード大学での学生生活を過ごしました。

設立100年以上経つ KCC-JEE では、いまだにロックフォード大学学長との繋がりが深く、現学長 Eric W. Fulcomer、前任 Robert Head も含め、理事を務めてきました。この度、ロックフォード大学グローバル関連 ディレクターである Maria Diemer が KCC-JEE 理事として就任いたしました。

(訳：水野 多美)



現在のロックフォード大学



Miss Anne Belknap

ロックフォード・カレッジ及びミルズ・カレッジ出身。1940-1941年に来院した“Friends of Kobe”の交換留学生としての戦前最後の一人である。国際関係悪化のために勉学を中断し、他のアメリカ人教師と共に帰国した。

※“Friends of Kobe”とは、KCC内に1930年につくられた日米親善のための組織。この組織からの奨学金にて、日本やアジアの研究を望む留学生を神戸女学院が受け入れた。

## 2021年度愛校バザーの中止について

創立145周年にあたる昨年、2020年度の愛校バザーを新型コロナウイルス感染症拡大のため中止とせざるを得なかったことを残念に思っておられた方も多くいらしたのではないかと拝察しております。

創立者タルカット先生のお誕生日を祝って、1911年に始まった愛校バザー、その収益は、学生・生徒の活動への補助や客員教員招聘費用をはじめとして、広く学院と関係のある施設や団体への献金としても用いられています。

そうした愛校バザーの精神を受け継ぐという観点からも、2021年度は何とか規模を縮小してでも開催できるようにと考え、日程も年明け早々に10月23日(土)へと変更し、コロナ下での開催について例年とは異なる部分が多くなると考えられるため入念な事前準備が必要であることを確認のうえ、準備を進めておりました。しかしながら、9月上旬になりましたも感染症拡大が収まっておらず、今年度も開催中止を決定するにいたりました。学院関係者並びにご来場くださるみなさまの健康と安全を最優先に考慮したうえで判断でございますことにご理解を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

2022年度こそは盛大に愛校バザーを開催することができますように心より願っております。来年5月21日(土)、岡田山でお目にかかりましょう。

(愛校バザー実行委員長 井出 敦子)

## 新型コロナワクチン職域接種実施について

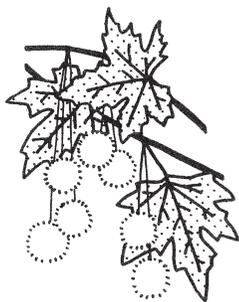
2021年8月30日から10月8日における平日20日間、第3体育館を会場に学生生徒、教職員とその家族、めぐみ会役職員、および近隣にお住まいの一般市民を対象として約2,000人、合計4,079回の接種をおこないました。

本学院の職域接種は、いくつかの特徴がありました。一つは、医療系学部と付属医療機関を持たない本学院において、学外の医療従事者(医師40名、看護師36名、薬剤師24名)の協力を得て接種を実施したことです。とくに、卒業生の医療従事者で構成するKCメディカルからは、医師24名、看護師1名という大きな協力を頂戴しました。また、教職員、めぐみ会の皆様からのお呼びかけにより、多くの医療従事者に出務いただきました。毎日の接種では、中野敬一学長、大澤香大学チャプレンに朝の礼拝を執りおこなっていただきました。

今回の職域接種のもう一つの特徴は、12歳以上の未成年者への接種を安全確保の工夫をしつつおこなったことです。中高部生326名とともに、学外の未成年者約400名に接種をおこない、一般市民の方から多くの感謝の言葉をいただきました。

接種は、音楽学部ウインドオーケストラの演奏(CD)を会場全体で聴きながらおこなわれました。学院関係者の素晴らしいチームワークのおかげで、無事に職域接種を完了できました。ご支援くださったすべての方に、深く御礼申し上げます。

(ワクチン接種推進委員長 佐藤 友亮)



一日のはじまりは礼拝から

## 「定期寄付」を開始しました

平素は神戸女学院教育振興会募金事業にご厚志を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、このたび「クレジットカードからの定期寄付」を開始しましたのでお知らせいたします。インターネット上であらかじめ年間の寄付回数（毎月・年2回・年1回）および金額を指定いただくことにより、自動的にご寄付いただくことができます。

あわせて、Pay-easy（ペイジー）決済も開始しました。インターネットで申し込み後、ネットバンキング等でお支払いいただけます。

くわしくは、振興会ホームページもあわせてご覧ください。

神戸女学院教育振興会 検索



なお、新型コロナウイルス感染症流行による教学上、および生徒・学生の経済的影響が大きいことをふまえ、2021年度についても昨年度と同様にご芳志の全額\*を生徒・学生の支援に充てさせていただきます。※別途用途指定のある場合を除きます。

引き続き、神戸女学院に連なる皆さまのご支援を賜りたく、よろしく願い申し上げます。

(教育振興会事務局)



## 宗教強調週間 プログラム報告 (11月8日～12日)

### <チャペルアワー・アッセンブリアワー>

- 11月8日(月) 学院チャプレン 中野 敬一  
 11月9日(火) 「黄金律(The Golden Rule)を生きる」  
 同志社女子大学名誉教授・  
 学校法人梅花学園学園長  
 近藤 十郎  
 11月10日(水) 「あなたの知らない人生も」  
 日本基督教団甲東教会牧師 新堀 真之  
 11月11日(木) 「道をそれることの勧め」  
 公益社団法人好善社代表理事  
 (日本基督教団教務教師)  
 三吉 信彦  
 11月12日(金) 「記念賞授与式」  
 引き続き講演「コロナ後の世界をどう生きるか」  
 本学名誉教授 内田 樹

9日の教職員礼拝では、近藤十郎氏に「芽生え育ちて 地の果てまで」と題してメッセージをいただき、続けて永年在職者表彰式がおこなわれました。13日の学生寮夕拝では日本基督教団仁川教会牧師で本学非常勤講師の杉田俊介先生にお話しいただきました。期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、学生・生徒による奨励や奏楽のご奉仕をいただきました。ご多忙の中、多くの方のお支えのもと全てのプログラムを終了いたしました。深く感謝いたします。

(チャプレン室)



チャペルアワーの様子

### <中高部礼拝>

新型コロナウイルス感染症の影響で、全校礼拝が守れない状況が続く中、宗教強調週間を守りました。月曜日から水曜日は放送礼拝、木曜日、金曜日は動画による礼拝という新しい形式での礼拝となりました。

11月8日(月)は中野敬一学院チャプレンから年間標語聖句を通して、「愛神愛隣」の精神と呼びかけに応えて生きることを教えていただきました。

9日(火)は梅花学園の近藤十郎先生から、夢を抱くこと、夢を語ることの大切さを教えていただきました。

10日(水)は命の火を灯して生きるということをテーマに、木曜日と金曜日の礼拝をご担当くださる奥田知志牧師、藤藪庸一牧師のお働きから学ぶ時をもちました。

11日(木)は奥田知志牧師から「助けて」と言えることの大切さを教えていただきました。人は助け合って生きる存在として造られたのだという言葉が心に響きました。

12日(金)は藤藪庸一牧師から「あなたは神の目に尊いのだ」ということを教えていただきました。ご自身の闘病の経験を交えながら、「どのような弱さを抱えているとしても、それでもあなたの存在には意味があるのだ」という言葉は大きな励みになりました。

早天祈祷会はS3の2名が奨励を担当して下さり、祈りから始まる生活について考える機会を与えられました。

放課後プログラムは、水曜日に自治会主催の「ジョギアトーク」を開催しました。例年、学年を越えた生徒同士の語らいの時を守ってきましたが、今回は教員も加わる形で実施いたしました。こうした自由で闊達な語らいの時を大切にすることで、中高部が1つの共同体として成長・成熟してゆくのではないかと思います。

12日(金)には中高部の卒業生で、自転車競技でオリンピックに2大会連続出場した與那嶺恵理さんを講師としてお招きし、「白熱教室」を開催いたしました。参加者からの質問に答える形で、ご自身の経験や考えを語っていただき、恵まれた時間となりました。

講堂での全校礼拝が実施できない状況ではありますが、今年度の宗教強調週間も、改めて「愛神愛隣」について考え、神戸女学院で学ぶことの喜びや意味を確かめる機会になったと感じています。

(中高部チャプレン)

松岡享子さん(児童文学者 1957年文学部英文学専攻卒業 本学名誉学位・教育文化博士 公益財団法人東京子ども図書館名誉理事長)が、本年度の文化功労者に選ばれました。

松岡さんは「神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール」初代審査員長をお引き受けくださるなど、学院へ多大なご尽力をいただいております。

東京子ども図書館ホームページに、特設ページが開設されていますのでご覧ください。

## &lt;留学報告&gt;

## SABBATICAL AT UNIVERSITY OF BERGEN

VAAGE Goran



I was very fortunate to be able to spend a year researching linguistic- and cultural contact between Old Norse, Sami- and Christian cultures on the Scandinavian Peninsula between August 2020 and August 2021. I was

taken very good care of by my host professor Harry Solvang, and the staff at University of Bergen, Faculty of Foreign Languages, where I had my office.

Bergen is the second largest city in Norway, and a historically important Hanseatic hub situated on the West coast. From there I was able to travel to several coastal towns as well as conducting two fieldwork sessions to Sampi, the polar area where Sami people live nomadically by herding rein deer. Modes of travel were airplane, the Norwegian Coastal express, and occasionally I took the bus, for example the Alta-Karasjok route with only two departures a week.

The Northern areas of Norway belong to the periphery, and this is advantageous for research within the Humanities because traditions and rites are better preserved further away from centers of dominance. I am truly grateful for being given the chance to experience such ancient rites in person, and to be given the opportunity to collect valuable data. I thank Kobe College, teachers, and staff from the bottom of my heart.

(英文学科准教授)

## コロナ禍でのカナダ留学を終えて

三宅 志穂

2020年9月から1年間、University of British Columbia (UBC) に Visiting Professor として滞在しました。当初予定していた4月に新型コロナウイルス感染症のため国境閉鎖になり、いったん断念しましたが、海外渡航者受け入れの現状や見通しについて UBC スタッフが逐次連絡をくださり、渡航と滞在のテクニカルなサポートをしてくださりました。そのおかげで5ヶ月後の留学実現となりました。

さて、カナダ到着後は2週間の隔離生活を経て、研究生活を満喫…といきたいところでしたが、居住地区外への移動禁止が長く続いてしまい、フィールドワークによる新しい資料の収集、現地専門家から直接話を聞き取るという手法で研究をしている私にとっては、どうしようもない状況が続きました。キャンパスロックダウンも1年中続きました。

一方 St. John's College (寮) では文化や年齢を超えて、たのしい仲間と出会うことができました。寮に課された制限も厳しいものでしたが、この状況下でいかに皆が幸せに暮らすか、世界中から集まった若い英知がお互いに支え合い乗り越えていく様子を目の当たりにできました。信頼できるリーダーの存在と誰も犠牲にしないやり方の追究、それらを兼ね備えたコミュニティに一時でも所属できたことは幸せでした。St. John's College で過ごした時間は宝物です。

(環境・バイオサイエンス学科教授)



世界中の国旗が並んでいる St. John's College のダイニングホール

史料室の窓(55)

## 女学院生は歌がお好き

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

Beauty becomes a college, Glory befits a soul.  
God-made and man-made, Grows the radiant whole.

神戸女学院記念歌 Beauty Becomes a College の冒頭の一節です。第5代院長 Miss Charlotte Burgis DeForest (1879-1973) が出来上がっていく岡田山キャンパスを見ながら神への感謝を込めて作られた美しい詩に、67年の時を経て曲が付けられ、現在まで歌い継がれています。もしかすると、学院歌よりも歌ったり聞いたりする機会が多くて、こちらの方が印象に残っているという学生さんもいらっしゃるかもしれませんね。

実は、神戸女学院には記念歌を作るという伝統があって、今残っていて歌い継がれているもののほかにもいくつかの曲が作られ、歌われていたという歴史があります。今回はそんな神戸女学院の歌をいくつかご紹介したいと思います。

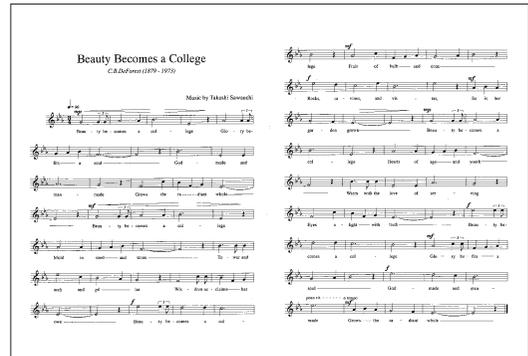
まず、記念の歌というと一番に思い出すのは125周年記念歌ですが、古くは1909年に制定された創立者記念日の歌があります。作詞者は不明ですが、遠い異国の地にキリスト教と女子教育を根付かせていった創立者たちの苦労を歌っています。

1918年には同窓会の歌が作られました。讃美歌の曲に歌詞を付けた英語の歌なのですが、歌詞は何と第4代院長 Miss Susan Annette Searle (1858-1951) の作品です。

宣教師の先生が作詞した歌として他に記録に残っているのは Song to sing at Miss DeForest Anniversary. 1930年に作られたものでデフォレスト先生勤続25年祝賀式で披露されました。

先生方だけでなく学生・生徒たちも事ある毎に歌を作っていたということが同窓会誌(現・広報誌)『めぐみ』に出てきます。1918年、自治会歌の歌詞が発表されました。1926年には高等女学部(現・中高部)生作詞、音楽部生作曲によって創立50周年記念祝賀の歌が作られました。1927年の創立者記念日にはキャンパス内の各建物の歌を作ったそうです(曲は1つを除いて讃美歌)。当時、春日野墓地にあった創立者の一人 Miss Eliza Talcott (1836-1911) のお墓に行った後、校内を行列して各建物の前で作った歌を歌って最後に校歌(学院歌)を合唱したとあります。どんな建物が歌われたのか見てみましょう。

体操館(1911年建築)、葆光館(1906年建築、高等女学



Beauty Becomes a College

部校舎)、家齊館(1914年建築、家政実習用校舎)、南舎(1875年建築、第一校舎、寮)、寄宿舎(1888年建築、中舎)、理科学館(1894年建築)、向上館(1922年建築、専門部校舎)、音楽館(1894年建築)。この順番で回ったとすれば、旧山本通キャンパスの一番奥、北側から正門に向かって南に行進したことになりますね。学生らしい楽しい歌詞が見られます。家齊館3番にはかきもち、栗饅頭、カステラ、キャラメル、チョコレートなどのお菓子の名前が登場、南舎2番には「南舎こそ愛と知識と信仰とつよき力のしるしなれ」という一節があり、ここが神戸女学院の中心であると意識した歌詞といえるでしょう。理科学館は「學者ぞろひであらうと浮世はなれた理科学館」この歌詞を2回繰り返します(曲は「もしもし亀よ」です。当時の学生になりきって歌ってみてください)。

創立75周年にも音楽学科の学生の作詞で記念の歌が作られています。作曲は音楽部の教授でした。

今回ご紹介したほかにもいろいろな歌がありました。図書館に収蔵されている *Song-album, compiled by student self government, Kobe College, 1935.* には当時残っていて歌われていたであろう歌が収録されています(残念ながら1927年の歌は入っていないようですが)。

これらの歌は創立者記念日の歌を除いて、もう歌われていません。その存在すら忘れられています。けれども、何かを記念する時に皆で声を合わせて歌うという伝統は忘れられていないと思います。あと数年で神戸女学院は創立150周年を迎えます。その時にはどんな歌が紡ぎだされることになるのでしょうか。

## ＜事務室探訪＞

### 国際交流センター

神戸女学院創立以来の教育の根幹である「国際理解の精神」と「リベラルアーツ（自由になるための技術）」に共通するのは、「自分の固定観念や常識、従来あたりまえだと考えてきたものを相対化する視点を持つ」ということですが、その視点を体得するもっとも有効な手段のひとつが海外留学などの国際交流体験であると言えるでしょう。

しかしながら、海外留学（語学研修を含む）は、ここ2年、コロナ禍によってほぼ全面的に中止を余儀なくされてきました。そのために学生たちの国際交流や留学に対する興味・関心が薄れてきているように感じられます。

こうした状況下では、いみじくもわたしたち教職員自身が「いかに従来の思考や業務の枠組みを当然の前提とせずに、クリエイティブな業務の提案・展開ができるか」問われています。国際交流センターでは、様々な制約がある中で、これまで夏期・春期語学研修をオンラインで実施したほか、海外留学生バディの活動にZoomを使用するなど新たな取り組みにチャレンジしています。また広報力強化のために、学生対象のニュースレター発行も始めました。

わたしたちは留学・国際交流プログラムを通して学生の成長に寄与し、そして本学創立以来の「国際理解」の精神を具現化し大学全体の発展に貢献することを目指して、これからも課員一同一致協力して職務に精励してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

（国際交流センター課長）



10月末、デフォレスト館前にて

### チャプレン室・宗教センター

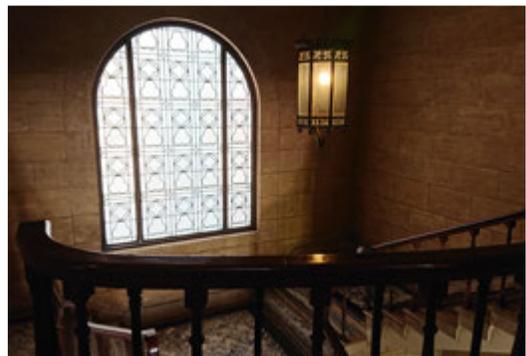
新連載のバトンが総務課から回ってききましたので、チャプレン室・宗教センターについてご紹介いたします。

チャプレン室は学院全体のキリスト教主義に基づく教育に関わる部署です。学内外の奨励者・奏楽者（学院オルガニスト）や関係部署の協力のもと様々な調整をおこない、日々の礼拝や行事が滞りなくまもられるようサポートしています。裏方業務が多いですが、チャプレン室の名前が一番表に出る時期はやはり学院クリスマス礼拝でしょうか。今年は残念ながら一般公開が中止となりましたが、来年度こそは皆様をお迎えしてクリスマスをお祝いできればと願っています。

宗教センターでは大学のキリスト教活動をおこなっています。「トッカーレ！パイプオルガン♪」では音楽学部生以外のオルガニスト育成を目指したレッスンをおこなっています。宗教センターでも練習することができます。新型コロナウイルス感染症の影響で今は様々な活動に制限がありますが、イースターや収穫感謝記念日など、キリスト教に関連するイベントも企画しています。

そして、目の前の仕事以上に大切なものは、一人ひとりとの出会いです。「何となく」ふらっと立ち寄っていい場所。それが宗教センターであり、チャプレン室です。

（チャプレン室）



ウィルソン記念窓にいつも見守られて

## 大学報告

### OAFF『竹で稼ぐ男たち』学内上映会

文学部 英文学科 4年生

シャヒーン・ディル・リアズ監督によるバングラデシュが舞台のドキュメンタリー映画『竹で稼ぐ男たち』(Bamboo Stories)が、10月24日講堂にて上映されました。

作品の字幕制作は英文学科の学生が手掛け、第16回大阪アジア映画祭で2021年3月10日に上映されました。また、オンラインシンポジウムも開催され、シャヒーン・ディル・リアズ監督と音響のマシュー・ラフマン・マスード氏によるトークも行われました。

字幕制作は3日間にわたり、31名の学生により行われました。大阪アジア映画祭との共同制作は今回で2回目になります。昨年度は対面での作業が可能でしたが、今年度は新型コロナウイルスの影響によりオンラインによる作業となりました。

字幕制作には細かいルールがあり、映像に重ねた際に違和感のない字幕にする必要があります。物語のバックグラウンドも知っておかなければなりません。登場人物の背景を知ること、セリフの訳し方も変わってくるのです。南出准教授、Jones 准教授の指導の下、学生たちは試行錯誤しながらも熱心に取り組みました。

本学での上映会には60名の方が参加され、皆さま笑顔で講堂を後にされました。上映前には参加した学生が、コロナ禍での貴重な経験になったと述べましたが、どこか遠いイメージがあるバングラデシュですが、この作品を通して登場人物たちが「今まさに生きている国」なのだと感じることができました。



竹で稼ぐ男たち

### 日本環境毒性学会研究発表会に参加して

人間科学研究科 人間科学専攻 2年生

8月26日、27日にオンラインで開催されました「令和3年度日本環境毒性学会」において研究発表を行い、若手研究奨励賞をいただきましたので、ご報告させていただきます。

発表演題は、「ジクロフェナク曝露メダカにおける透明骨格三重染色及び網羅的遺伝子発現解析による下顎欠損誘発機序の解明」です。これは私が現在取り組んでいる修士研究の成果に、所属研究室の先行研究による知見を合わせた内容になります。所属研究室では、河川に流出している解熱鎮痛剤のジクロフェナクが、魚類の下顎を欠損させる毒性作用を有することを見出していました。その毒性メカニズムは未解明でした。そこで、下顎欠損に関与する細胞の染色手法を新規に開発すると共に、欠損が進行中の下顎組織内の網羅的遺伝子発現解析を行うことにより、そのメカニズムの一端を明らかにすることができました。

私は早期卒業制度を利用し、大学3年次終了をもって大学院に進学しましたので、進学当初は様々な不安もありましたが、周りの支えもあり、着実に研究成果を挙げることができました。

この度、このような輝かしい賞を頂戴し光栄に思います。残り僅かな大学院生活ですが、本受賞を励みに、より一層研究に注力してまいります。最後に、指導教官である横田弘文教授、また、共同研究としてご支援くださる九州大学大学院の大嶋雄治教授並びに学生の方々に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

## プロジェクト科目： モーリシャス海洋汚染事故

2021年度総合文化学科プロジェクト科目の一つで、「モーリシャスの海洋汚染事故とボランティア活動」という文理横断型のリベラルアーツ的なテーマを扱いました。この科目は総合文化学科の北川将之が発案・計画し、環境・バイオサイエンス学科の張野宏也教授の協力を得ておこないました。

アフリカ東部の「インド洋の真珠」と呼ばれる自然豊かな島国モーリシャスの沿岸付近で、2021年7月、日本の輸送船が座礁し油が流出する事故が起きました。この事故は世界有数の希少動植物が生息する沿岸域の生態系に打撃を与えると同時に、現地の人々の生活に多大な影響を及ぼしました。新型コロナウイルス感染症の影響で海外渡航が困難ななか、モーリシャス在住の方と教室をオンラインでつないで話を聞くことにしました。

授業では、ボランティアでヘアドネーション（髪の毛を切って束にして油の吸着剤として使用する活動）をおこなった現地在住の日本人女性の方（永井葉子氏）、事故を起こした船をチャーターしていた日本の企業で、昨年9月から10億円規模の社会貢献事業（漁師への技術支援、サンゴやマングローブ林の継続的調査など）を開始した商船三井の社員の方（山下悟郎氏）、日本政府から派遣されて現地で調査をおこなったJICA国際協力専門員の方（阪口法明氏）の3名の話をお聞きしました。履修した学生は、現地で暮らす人々が「自分の庭が汚された」気持ちであることを共感し、事故の背後にある構造的問題について考えました。

（総合文化学科教授 北川 将之）



オンライン授業の様子

## オンライン国際交流サマープログラム （日越大学）報告

日越大学（Vietnam Japan University, VJU）はベトナム有数の国立大学であるハノイ国家大学を構成する一大学として2014年に日本・ベトナム両国政府によって設置されました。この度、英文学科・南出准教授からのご紹介を契機として、本学・日越大学教員の協働によるオンライン国際交流サマープログラム（日本人・ベトナム人学生の交流会）を実施することになり、本学からは14名、全体では52名の学生が参加しました。

7月1日のキックオフイベントを経て、8月5日の第1回集中講義では「日本で急増するベトナム人技能実習生の現状」「食をめぐる文化交流・変容」について共に学びました。その後、日越混合の少人数グループに分かれて、講義内容を踏まえた「日本とベトナムの文化・社会」に関する比較研究を進めて、8月20日にグループごとに日本語や英語による最終発表をおこないました。テーマは日越のお盆やお正月の比較、自然災害、公共交通機関比較など多岐にわたりました。

参加学生は、講義の時間外にもLINEやZoomを使ってベトナム人学生と連携・協働し、言葉の壁を乗り越えて、プレゼンを完成させました。参加した学生たちはこの交流会を通してベトナムという国をより身近に感じることができるようになったようです。コロナ禍で海外渡航が難しい状況が続いていますが、学生の皆さんにはオンラインによる海外交流にもぜひ積極的に参加して国際的な視野を広げていただきたいと願っています。

（国際交流センター課長）



最終発表後、スクリーンショットで記念撮影

## ＜音楽学科の取り組み＞

### 「エレガーノ西宮」 オープン記念コンサート

8月2日、スミリンケアライフ株式会社が運営するサービス付き高齢者向け住宅「エレガーノ西宮」にて、音楽学部学生と教員による同施設のオープン記念コンサートを開催しました。

スミリンケアライフ社と本学は2020年3月に産学連携協定を締結しました。音楽学部学生と卒業生および教員が、同社が2020年5月に西宮市内に開設したサービス付き高齢者住宅「エレガーノ西宮」で様々な音楽プログラムを実践し、高齢福祉・人材育成・芸術文化の発展に寄与する取り組みです。このコンサートは昨年5月に開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となっていました。

当日は松浦修音楽学科准教授による指揮のもと、管楽器や打楽器を専攻する学生12名が演奏を行い、サウンド・オブ・ミュージック、日本の童謡メドレー、展覧会の絵等の7曲を演奏しました。

出演した学生からは「少しでも明るく幸せな気持ちになっていただけて嬉しい。貴重な機会をいただいた」、ご入居者様からは「コロナ禍で外出できず久しぶりに生の演奏を聞いて嬉しい」等、ご参加いただいたご入居者の皆様と楽しいひと時を過ごすことができました。

当日はNHK神戸放送局が取材に訪れ、同日夕方の情報番組「Live Love ひょうご」でコンサートの模様を放送されました。

(音楽学科准教授 松浦 修)



コンサートの模様

### 就職支援への取り組み

7月15日、陸上自衛隊伊丹駐屯地内にて、陸上自衛隊中部方面音楽隊（吹奏楽）による入隊希望者への音大向け説明会が開催され、関心のある音楽学部ウインドオーケストラ学生16人が説明会に参加しました。

自衛隊は陸上・海上・航空のそれぞれ地域ごとに音楽隊があり、音楽を専門に学んだ学生の進路として全国的に人気の高い職種です。本学では初めての開催となりました。

当日は柴田昌宜隊長による指揮のもと中部方面音楽隊によるミニコンサートが披露され、八木澤教司音楽学科専任講師の作品「インテルメッツォ」の他、歌姫として知られる陸上自衛隊中部方面音楽隊のソプラノ歌手鶴真衣3等陸曹による“Time to Say Goodbye”等が演奏されました。高度な技術に支えられた繊細かつダイナミックな演奏に、学生たちは聴き入りました。

ミニコンサートに続いて自衛隊音楽隊の仕事内容と採用試験についての説明がおこなわれ、国家的行事での式典演奏や各地域での演奏等の社会貢献活動等が紹介された他、音楽隊への入隊には自衛官として採用後に行われる職種説明会（演奏オーディション）に合格することで配属されること等が説明されました。

説明会終了後はパートごとに音楽隊隊員とコミュニケーションの時間がとられ、学生たちは熱心に質問をしました。学生にとって卒業後の進路選択の幅が広がる有意義な機会となりました。

(音楽学科准教授 松浦 修)



ミニコンサートの模様

## 2021年夏のシステムリブレース

盛夏休業を中心に夏休み期間中にネットワークシステム・サーバシステムのリブレースをおこないました。シングルサインオンシステム（以下 SSO）を2016年導入のリバースプロキシー認証方式から Microsoft 社の AzureAD を利用した Shibboleth 方式に変更し、従来よりも容易に SSO システムに追加できるようになりました。図書館マイアカウント、ATR-CALL、Proself、SSL-VPN が新たに加わり、前回からの懸案であった Universal Passport も今年中には SSO になる予定です。

パスワードポリシーを変更し、2週間の有効期限を無くし、多要素認証情報（電話番号、認証アプリ）を利用して自力でパスワードをリセットする Self Service Password Reset のサービスを開始しました。他方、セキュリティ強化のための多要素認証は今年度末から運用を開始する予定です。

メールシステムは Active!mail に加えて、メール配送管理システム (Active!gate) と迷惑メール管理システム (Active!hunter) を導入し、利便性を向上しました。e-Learning システムの Moodle はアプリにも対応した新しい Moodle (Ver3.9) の検証利用を開始し、来年度からの利用開始に向けて、現行 Moodle (Ver3.0) からの移行を年度末に行う予定です。

ネットワークシステムは、学内で遠隔授業を安定して受講できるように、無線 LAN の増強と範囲を拡大するとともに、ID/PW の設定が一度で済む 802.1x 認証を導入し、Bring Your Own Device に対応しました。スマートホンやタブレット等の持ち込み端末のインターネット接続の利便性が格段に向上しました。

システムリブレースの度に皆様にはご迷惑をお掛けしますが、学院や皆様のご理解とご協力に感謝しております。

（情報処理センターディレクター 出口 弘）

## 本学のPCIT研究論文が 日本遊戯療法学会奨励賞を受賞！

本学心理相談室で実施した PCIT（親子相互交流療法）についての研究論文が2020年度日本遊戯療法学会奨励賞を受賞しました。PCIT とは、2008年に日本に導入された米国発祥の遊戯療法をベースとした行動療法で、親子関係の再構築と幼児の問題行動改善に効果がある EBP（エビデンスに基づく心理療法）です。本学では2013年に関西初の PCIT を実践しました。本論文は筆者が須藤准教授とおこなった PCIT 事例を通して、PCIT の構造や実践方法、養育者への具体的な介入について解説するとともに、PCIT が問題行動の激しい子どものみならず、日本人に多い過剰適応タイプの子どもの親にも有効であること、さらに、（主張を控えがちな）日本人の母親にとって適切な統制力をはぐくむ PCIT が子どもの情緒の安定化に有用であることなどを論じました。査読の際に、学会編集委員会から本論文の資料的価値を評価していただき、特別に本論文の掲載ページを追加して PCIT の構造や専門用語についても詳しく掲載するようとの依頼があり、PCIT を日本の心理臨床家にご紹介する大変良い機会を得ることができました。2019年度から筆者により本学大学院では PCIT 実践者の養成を開始しましたが、今回の受賞は大きな励みとなり、本学の臨床教育にも非常に良い影響を与えていただきました。この経験をもとに本学の地域連携の一環として、より良い臨床実践ができますよう精進してまいります。PCIT 実践をこれまで温かく支えてくださった本学の皆様

（心理・行動科学科教授 國吉 知子）



## 八木澤教司専任講師作曲作品が 東京2020パラリンピック開会式で使用されました

「東京2020パラリンピック競技大会」の開会式において、天皇陛下と国際パラリンピック委員会（IPC）会長の入場曲として、八木澤教司音楽学科専任講師が作曲した「ハート・イン・モーション」が採擧されました。

これは同大会のためにオリジナルで作曲したのではなく、世界最大手の音楽出版社であるハル・レオナード・ヨーロッパから既に出版されていた作品であり、世界中の数多くの楽曲から場に相応しい作品として選ばれました。

なお、本誌23ページ「私の研究」にも八木澤専任講師が執筆した記事を掲載していますので、あわせてご覧ください。

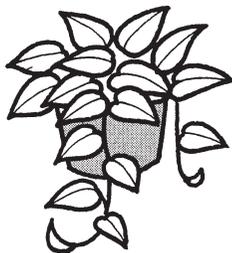


八木澤 教司  
音楽学科専任講師



「ハート・イン  
・モーション」  
(YouTube 動画)

(学報委員会事務局)



## <夏期語学研修報告>

昭和ボストン

### 夏期オンライン研修に参加して

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 2年生

英語が得意ではない私は、この研修が始まる前まで授業についていけるかどうか不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、先生方はとても親切で、安心して授業を受けることができました。

American culture の授業では、アメリカの歴史や文化、現代社会が直面している様々な問題について学ぶことができました。特に心に残っている授業は、SNSでの誹謗中傷やいじめは「21世紀の魔女狩り」といえるのではないかという話です。今SNSで起きている問題は、当時自分と違う他の人を排除しようとした魔女狩りに似ていると思いました。特にアメリカのような様々な人種がいる国では、お互いを理解し合うのは簡単なことではないかもしれません。私たちはどんな人種や性別、文化でもお互いを認め合い、尊重し合うことが大切だと考えさせられました。

English class では、自分の意見を述べる練習をしました。初めは授業中に英語を発言するのは緊張しましたが、間違えても優しく教えてくださる先生や、何度も発言する機会があったおかげでだんだんと慣れてきました。また、ボストンの様々な観光地を動画で巡りました。それぞれの観光場所について丁寧に説明してくださったので、実際に観光しているような気分になれて楽しかったです。その他にもピラティスやホームツアーにも参加しました。オンラインで様々なことを学び、充実した時間を過ごすことができ、挑戦して良かったと強く思いました。

## ヨーク大学

## 夏期語学研修を通して

文学部 英文学科 2年生

私は今夏に参加したカナダ、ヨーク大学語学研修を通して、成長した点とこれからの改善点を見つけることができた。

研修を通して特に成長した点は Listening 力と Speaking 力だ。はじめはとても緊張していて、先生方は全員現地の方であるため、当然日本語が通じない。とても不安な環境であったが、むしろこの環境が私の Listening 力と Speaking 力を鍛えてくれた。毎日出される課題や予習を完璧にこなすには、集中して先生の言葉を聞き、聞き取りにくかったところや質問があるときは英語で先生に質問しなければいけないため、日本語に頼らず英語を使う機会が多くあった。また、授業はとても効率的な楽しい英語学習方法で、この方法を続けていけばより時間をかけず4技能を向上させることができるだろうと感じた。そして、授業外で行われる現地学生との Club Activity では、友人同士のように親交を深めながら、日常会話で使う単語や言い方を学んですぐに実用することができた。研修で、英語だけの環境で集中的に学習し、英語力を鍛えながら新たな知識を学ぶことができ、勉強意欲が今まで以上に掻き立てられた。

そして、これから改善していくべき点も見つけることができた。それは Confidence を持つことだ。英語に自信がなく、不安と恥ずかしさが残るままでは、一向に英語力は上がらない。間違ふことを恐れず、Confidence を持って積極的に英語を使って学習していくべきだ。これからの英語学習において Confidence を持つことを忘れないでいたいと思う。



授業中の様子

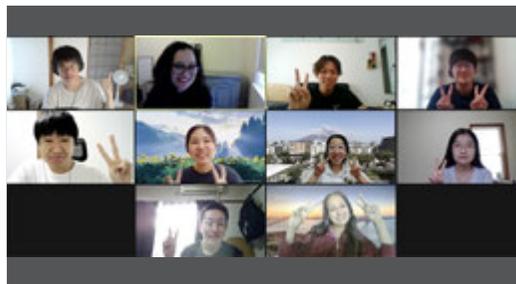
## 西オーストラリア大学

## オンライン語学研修で学んだこと

人間科学部 心理・行動科学科 2年生

私は8月半ばからオンラインで行われた西オーストラリア大学語学研修に参加させていただきました。オンラインでの語学研修という初めての体験をした私は5週間にわたるこの研修を通して改めてコミュニケーション能力の大切さと英語を学ぶことの利便性を実感しました。この語学研修は日本からだけではなくサウジアラビアやインドネシアから参加している方もおり、授業で設けられた会話の時間や課外アクティビティ内で様々な国の方々と話し、それぞれの国の文化や習慣などを知ることができました。また、日本人の学生は鹿児島や神奈川からの学生が多く、それぞれの地域の郷土料理や観光地について英語で語り合うこともありました。最初は英語力に自信が持てず自分から会話に参加することができなかった私ですが、回数を重ねるごとに自分から話題を出すことができるようになり会話を楽しむことができるようになりました。また、授業では数回テストが行われ、テスト後には担当の先生との個人面談をする時間があり、自分の英語力の弱いところや次に気を付けるべきところなどを見直すことができ、語学能力をあげることができたと思います。実際に、授業内で取り上げられた海外のニュースを自分の力で理解することができとても嬉しく思いました。

5週間にわたるオンライン語学研修という貴重な体験をさせていただけたことに感謝しています。ありがとうございました。



最終日にクラスの仲間と先生と

## <オンライン国際交流サマープログラム報告>

ベトナム日越大学とのオンライン学生交流会

### ベトナムの学生に刺激を受けた2日間

文学部 総合文化学科 4年生

8月5日と20日の2日間、オンライン国際交流サマープログラムに参加しました。日越大学と神戸女学院大学の学生約50名が集まり、Zoom上で講義を受け、意見を交わしました。

まず、事前に行われたキックオフ・イベントで、ベトナムの社会と文化に関する知識を深めました。なかでも印象的だったのは、ベトナムの政治体制についてです。共産党一党体制という強みがコロナ禍で発揮され、ベトナム国民の生活の安心・安全を保障していると知り、喜ばしく思いました。

集中講義では「日本におけるベトナム人技能実習生」と「食をめぐる文化交流・受容」について学びました。オンライン掲示板 Padlet を用いて、質問や感想をタイムリーに共有することで、理解がより深まったように感じます。講義を受けた後、英語でディスカッションを行い、グループ発表に向けて準備を始めました。主な連絡手段である Facebook の Messenger で興味のある分野を出し合ったり、パワーポイントの役割や提出期限を決めたりしました。ベトナムの学生は好奇心旺盛で、ときには関西弁を交えて会話する場面もあり、あたたかい雰囲気がチームワークに繋がったと思います。日越の交通手段について発表した私たちのグループは、第1位を受賞し、オンライン上で喜びを分かち合いました。

渡航が難しい今だからこそ、現地学生のリアルな声に耳を傾け、自分に何ができるかを考える、有意義な時間になりました。コロナ禍にもかかわらず、貴重な機会を与えていただき、心から感謝しています。ありがとうございました。



日越サマープログラム記念写真

## 音楽学部夏期講習会報告

2021年度音楽学部夏期講習会は、7月29日～8月1日の4日間、講座及び実技レッスンを中心に開催された。今年度は上記日程で対面レッスンにより実施した。

講習会には合計170名〔音楽〕140名、〔舞踊〕30名の受講生が参集し、短い時間ではあるが音楽学科の授業体験や雰囲気を感じ取り取っていただく良い機会になったことと思う。



講習会では、感染防止対策を徹底した上で聴音講座①②、楽典講座①②、新曲講座（いずれも〔入門〕〔実践〕）、初心者相談会、ミニコンサートなどを実施した。

各専攻教員による個人実技レッスンにおいては、密を防ぎ全体の進行の簡素化を図った。



また舞踊専攻は教員陣による実技レッスン指導、島崎 徹教授のアドバイスタイムや相談会、ショート・パフォーマンスがおこなわれた。

(音楽学部事務長 山原 一郎)

## 夏期インターンシップ実施報告

本学では、毎年、多くの企業や自治体・団体のご協力を得て、「学内募集インターンシップ」という形で学生に就業体験をおこなう機会を提供しています。参加時期は、夏休み期間中が主となります。

新型コロナウイルス感染拡大は1年が経過しても収束の兆しが見えず、先の見えない不安な状況が続いていましたが、募集を開始する時期は緊急事態宣言が解除されていたこともあり、例年通りの募集と選考をおこないました。

しかし今年は、インターンシップが実施される夏休み期間中に緊急事態宣言が発令され、開始直前で中止を決定する企業も多くありました。企業側よりインターンシップ実施の判断を求められた際は、学生本人に状況の説明をおこない、参加の可否について確認し進めていきました。企業によっては、実施期間の変更や、実施形態をオンラインに変更するなど、直前にも関わらず臨機応変に、安全第一でご対応いただきました。

今夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体・団体の皆様のお世話になりました。心より感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数）。

尼崎信用金庫（2名）、名鉄観光サービス（1名）、大阪シティ信用金庫（1名）、和歌山県経営者協会／スズキ自販和歌山（1名）、福井県経営者協会／福井銀行（1名）、姫路経営者協会／山野印刷（1名）／藤橋商店（1名）／永井産業（1名）／姫路ケーブルテレビ（1名）／ホテル日航姫路（1名）。

インターンシップは実際の仕事や職場の状況を知り、職業選択について深く考える大切な機会となります。本選考に向けて準備をしている学生にとって有意義な時間を提供できたこと、そして感染者を出すことなく無事に「学内募集インターンシップ」による派遣をおこなえたことに心から感謝申し上げます。

（キャリアセンター）

## インターンシップ参加報告

文学部 総合文化学科 3年生

3年生の5月、就職活動ってどうしたらいいんだろうと不安を感じていたところ、学内のキャリアセンターからインターンシップ募集のお知らせがありました。アルバイトの経験を通じて人と深く関われる仕事をしたいと考えていたため、地域密着の尼崎信用金庫の5日間のインターンシップに参加しました。

たくさんの学びがありました。プログラムの内容としましては、新聞の読み方、グループワーク、先輩職員・内定者座談会、さらに金融基礎知識の講義などでした。特に印象に残っているのは、グループワークです。リーダーとリーダー以外のメンバー、異なる2つの立場では求められる主体性が異なること、しかし自ら行動を起こすという点では同じであると気づくことができたからです。また、職員の方から個人ワークについて話しかけていただいたり就職活動に関する本もご紹介いただきました。就活生の私も、積極的に会社のニュースや実際に勤務されている会社に足を運び、情報を仕入れていく必要があると思いました。

非常に濃い、今からの就職活動を自らの責任のもとおこなうという自覚が芽生えたインターンシップでした。このような機会を設けてくださったキャリアセンターに感謝いたしますとともに、今回参加して得られた学びを心に留めて就職活動をおこない、立派な社会人へと日々精進してまいります。



就職活動に向けて

## 秋季大学教授会研修会

神戸女学院大学では、FD 活動の一環として毎年度、大学教授会研修会（以下、研修会）を開催しています。研修会では、本学の教育の質的向上に資するために、時宜にかなった重要なテーマを毎回設定し、報告者による話題提供と参加者による小グループでのディスカッションをおこなっています。

2021年度の研修会は、「いま・ここ、そしてこれからの神戸女学院大学——大学と各学科の取り組みから考える——」と題し、大学の教育方針および各学科の教育活動の現状と課題を共有したうえで、今後の本学の教育の取り組みについて議論する機会としました。

研修会では、中野敬一学長および各学科長——松尾歩英文学科長、建石始総合文化学科長、松本薫平音楽学科長、小林知博心理・行動科学科長、塩見尚史環境・バイオサイエンス学科長——からの各約20分の報告（計2時間）をオンデマンドで配信し、参加者はそれを事前に視聴したうえで、学科をベースとした12のグループに分かれ、オンラインで意見交換をおこないました。神戸女学院大学は小規模な大学でありながら、これまで他学科が実施している教育の具体的な取り組みや工夫について、なかなか詳しく知る術を持ちませんでした。学長や各学科長からのそれぞれ個性豊かで示唆に富む報告を視聴し、参加者は多くの刺激や有益な知見を得ることができました。さらにグループ・ディスカッションを通して、今後、私たちが歩むべき方向性を相当程度見定めることができたのではないかと思います。

今回の研修会の参加者数は、大学教員72名、大学職員（管理職）10名、法人5名の計87名でした。お忙しいなか報告動画を作成していただいた中野学長をはじめとする諸先生方、オンライン開催などの準備をいただいた学長室（FDセンター）のスタッフのみなさま、そしてご参加くださった全教職員のみなさまに、この場をお借りして衷心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

（FDセンターディレクター 金田 知子）

## 2021年度岡田山祭

### 岡田山祭実行委員長

10月30日に2年ぶりに岡田山祭が開催されました。オンライン開催という初の試みとなりましたが、たくさんの方々にご支援ご協力をいただき無事成功を収めることができました。今年のテーマは『桜梅桃李』～Over the Pandemic～でした。桜梅桃李というそれぞれが独自の綺麗な花が咲かせる四種類の木に、神戸女学院の学生を重ね、私たちが「自分らしさ」を大切に、コロナ禍を乗り越え綺麗な花を咲かせたいと願い、このテーマにいたしました。新型コロナウイルスの影響で思うように活動できていない部活動や同好会へ発表の場を提供すべくおこなったオンライン配信では、様々な団体の熱意のある発表にひたむきに努力してきたことがうかがえました。このような状況下では、組織を存続させていくことさえ容易ではなかったと思います。そんな中、輝く神戸女学院生の姿を目にすることができ、大変嬉しく思いました。

オンライントークショーとビンゴ大会にもたくさんの方が参加してくださり、「楽しかった」と嬉しいお言葉をいただきました。来年度は岡田山祭が対面で開催され、今まで以上に盛り上がり、多くの方々に神戸女学院大学や岡田山祭の魅力を感じていただけるよう期待しております。

最後になりましたが、今年度岡田山祭を開催するにあたり、ご支援ご協力賜りました学内外全ての皆様に心から感謝いたします。



岡田山祭実行委員会の1～3年生のメンバー

## &lt;私の研究&gt;

## 小説をどう読むか

溝口 薫



私の研究課題は三つあります。第一には19世紀ヴィクトリア朝期の英文学、特に小説研究ですが、本学の英文学科教授であった故松村昌家先生のもと、初めてその面白さに触れて以来継続してきた

チャールズ・ディケンズの作品解釈をおこなっています。研究方法は、作品が書かれた時代の社会・文化背景や作家自身に関する資料調査によります。この研究の興味深い処は、第二次、第一次資料を詳細にたずねていくと、過去という異文化空間をより具体的に理解できるのみならず、作家の問題意識が明確にたち現われてくる瞬間に遭遇できることです。こうして作家の意図に迫り、作品の解釈を試みています。

第二の研究課題は、このような作家研究方法から派生したのですが、サッカー、コリンズ、エリオットなどのディケンズと同時代の作家の作品や、続くモダニズムの時代を経て今日に至るまでのいくつかの社会的な小説作品研究です。二つの方向がありますが、一つは、19世紀前後を通して近代化されていく国民教育や女性の教育の勃興と発展をめぐる作家たちの反応や関心についての研究です。彼らがどのようにその意義や問題を捉えたかを通して、教育理想と現実の乖離に働く文化の諸力について考察しています。もう一つの方向としては、作品に窺える近代以降の人間のアイデンティティの多様なありようを他者との関連で読もうとしています。作家の意図に限るのではなく、テキスト自体をより綿密に読む最近の解釈学の立場から読むと、意味や言説が多層的に広がる小説の言語の不思議さや読むことで読み手の理解や言葉の地平が新たに広がる意義に気づかされます。この第三の方向では、小説の解釈行為と主体をめぐる倫理の関係を明らかにすることを目指しています。

(英文学科教授)

## 吹奏楽作品のレパートリー開発

八木澤 教司



音楽は空間芸術であるため、視覚的な研究成果の報告が難しい。私の専門である作曲は楽譜という形で残せるが、これは楽譜が読める者に限定される。作品は「演奏」あるいは「録音」によって、初めて広く認知されるのではないか。

作曲と言えど、そのジャンルは多岐に亘る。私は主に、中学・高校などの教育現場で演奏される吹奏楽（ウインドオーケストラ）のレパートリーを開発し、出版してきた。少子化が進む昨今、現場の実情に即した作品を開発し検証することが求められる。

本学に着任した2020年春の緊急事態宣言下では、コンサートホールでの演奏制限を強いられた。音楽では致命的とも言えるこの事態に、幸いにも学内で感染予防対策を前提にCDレコーディングを行うことは可能であった。こうした状況を逆手に取り、本学から新しいレパートリーを海外に発信するプロジェクトを考案し、世界最大手の音楽出版社であるHal Leonardのヨーロッパ支社へ本学との提携を依頼。国際的に著名な作曲家たちの最新作を、公式に世界初録音する権利を獲得した。これは15年以上作品を契約してきた信頼関係によって実現できたと自負している。

また、私自身も学生たちと共にリハーサルで研究を重ね「エターナル・フレンドシップ」という賛美歌を類推させるコラールを作曲。2021年6月にリリースされた神戸女学院大学音楽学部ウインドオーケストラのCD(WAKO RECORD)に収録し、9月に楽譜もHal Leonard Europe (de haske)から出版された。

さらに、同作品は米国Western International Band Clinic (WIBC)が選定するBand World Top 100として、2021年に世界中で出版された800曲を超える作品から選出された。この研究成果はヨーロッパ、アメリカの吹奏楽界を経由して、国内にも新たなレパートリーとして届くだろう。

吹奏楽というジャンルは、民族性や文化により国々で捉え方が異なる。これからも学生たちと共に調査や研究を重ね、本学から世界に向けて作品を発信したい。

(音楽学科専任講師)

## 中高部報告

## 第37回成田山全国競書大会 読売賞

高等学部 3年生

私は、第37回成田山全国競書大会で、読売賞という賞をいただきました。出品した作品は、かなの作品です。

今回の作品は書道部生活の中で、私が1番本気で取り組んだ作品でした。放課後だけでなく、朝休みや昼休みにも時間を作り何度も書道室に通いました。当たり前ですが、お手本に、そして自分の作品に向き合う時間が長いほど、その作品をよく知ることができると思います。書く度に毎回新しい発見があって、その発見を作品に取り入れていくうちに、どんどん自分の作品が良くなっていっていることを実感できてすごく楽しかったです。

私はかなが好きです。初めは、かなの柔らかい雰囲気になんとなく好きでした。今回の作品を作っていく中で、線の太さや筆遣い、墨の濃淡、余白など、全てがその雰囲気を作っているということを理解できた気がします。少しでも何かが違えば全く違う雰囲気の作品になります。そんなかなの繊細さが今は魅力的だなあと感じます。以前よりももっと、かなが大好きになりました。

完成した作品の写真を撮ることを忘れてしまい、また展示期間内に見に行くこともできなかったのが、自分が書いた作品を何らかの形で残すことができず少し残念です。しかし、楽しみながら作品を作っていくことができ、かなの魅力にも沢山気付くことができ良かったです。何度も添削してアドバイスをくださった先生には本当に感謝しています。卒業後も、書道を続けていきたいです。



## 国際音楽コンクール受賞のご報告

中学部 1年生

今年度、第4回モーツァルト国際音楽コンクール（クロアチア）にて第1位第1席を受賞しました。このコンクールには33か国から201名のコンテスト参加者が参加し、クロアチアを中心に、世界各国から集まった先生方が審査をしてくださりました。また、今年、第4回ヌーヴェル・エトワール国際音楽コンクール（フランス）第1位、第1回メディチ国際音楽コンクール（イギリス）第3位を受賞しましたことを併せてご報告いたします。

私が初めて海外のコンクールに出場したのは、小学4年生の秋でした。日本のコンクールと違い、ただ競争するのではなく、互いに褒め称え合うコンテストたち、私がピアノを弾いているというだけで温かく接してくださるハンガリーの人々の姿は、未だに忘れられません。帰国してからも、もっと沢山のひとと音楽の楽しさを共有したいと思い練習に励むことができました。

現在のコロナ禍、世界中の人々が一堂に会することはできない状況ですが、オンラインという形であっても、このコンクールに参加できたことに大きな意義を感じています。状況が許せば、勉強と両立しつつ、海外のマスターレッスンやコンクールにも積極的に参加し、もっと活動の幅を広げていきたいです。ご指導くださった全ての先生方に感謝して、これからも頑張りたいと思います。

## 2021年度中高校教職員研修会

2021年度中高校教職員研修会は、8月24日におこなわれました。昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大による休校等の影響もあり、教職員研修会も中止となったので、2年ぶりの開催となりました。

まず全体会として、夏休み中の行事報告とその後の話し合いについての発題をおこないました。今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響で、夏休み中の行事も大きな影響を受け、中止となった行事もありました。その中で、実施できた行事について、担当者から報告がありました。リーダーシップトレーニングキャンプについては、例年であれば学外のキャンプ施設にておこなうところを、学内実施に切り替えておこない、例年とは違う形でしたが実施できた旨報告がありました。エンパワーメントプログラムについては、ほぼ例年に近い形で実施できたとの報告がありました。海外渡航が制限される現状で、実施が困難となっている海外研修旅行については、その代替として新しく KCH-MLC Online Exchange Program が企画・実行され、その様子が報告されました。

行事報告ののちに、話し合いに関する発題がおこなわれ、続けて、7～8名の小グループに分かれての分団討議をおこないました。午前中の話し合いテーマは「授業時間について」と「休校期間中のオンライン授業についての共有」でした。昨年3月からの休校は急なことであり、事前に教員同士でオンライン授業の実施方法を十分に検討したりすることができず、個々の教員の技術と努力によっておこなわざるを得ませんでした。今回の話し合いを通して、個々の教員がおこなったオンライン授業についての知識を共有しあい、オンライン授業に関するさらなる技術向上の機会とすることができました。

その後、弁護士を講師として「教職員に求められるコンプライアンスとは ～私立学校における留意点～」というテーマの講演会を実施し、コンプライアンスについての理解を深める機会としました。コンプライアンスは、企業経営においてよく使われる「法令遵守」および「信用失墜行為の防止」についての考え方ですが、学校においても重要な考え方であることをお話いただきました。これまで、まと

まった形でのコンプライアンス研修を実施することができなかったことにも鑑み、コンプライアンスの基本から、コンプライアンス違反が問われる場面、コンプライアンス違反の結果と場面ごとの注意喚起、日常から備えておくべきことなどをお話いただきました。コンプライアンス研修においては、法律の条文などを読み、理解を深める必要があります。今回の講演では、法律の専門家であるプロの立場から、現場の教職員にもわかりやすい言葉でお話くださり理解を深めることができました。教員を取り巻く法的環境は非常に複雑で、かつ文部科学省からの通達等も多いため、継続した研修が必要であることなどもお話いただきました。また、今回の研修にあたり、2019年に兵庫県教育委員会から保護者・地域宛に出された「こんなことも『いじめ』になります」という案内についても話題にいただきました。

午後からは、現在中高校で議論を進めている中期計画委員会より発題があり、その発題に基づいて分団討議をおこないました。中期計画委員会では、中高校での教育活動をさらに充実させていくために、どのような取り組みが必要かを検討しており、今回の研修会では特に、教育設備の有効利用に関する議論と、GIGA スクール構想に関連するオンライン環境の整備やタブレットを用いた教育に関する議論をおこないました。教育現場へのタブレット端末導入は、新型コロナウイルス感染症のために、急速に進められましたが、教育に資する利用方法については模索が続いている状況です。神戸女学院中高校においても、どのような活用の仕方があるのかなどを話し合う機会となり、知識・理解を深めることができました。

冒頭でも述べたように、2年ぶりの教職員研修会でしたが、何らかのテーマに基づいて、腰を据えてじっくり議論する時間を取ることが難しい毎日の中、貴重な機会となりました。

(校務課長)

## S 校内大会

2021年度のS校内大会は、7月13日におこなわれました。本来は8日に実施予定でしたが、警報発令により休校となったため、日程を変更しておこなわれました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの5種目で、全学年クラス対抗戦です。日程変更の影響もあり、各種目の決勝をなくし、予選のみで順位を決定するという変則ルールとなりました。

下剋上を狙う下級生とそうはさせまいとする上級生との“仁義なき戦い”や、同級生同士の白熱した試合がとても印象に残っています。

今年度は新型コロナウイルスの影響による制限が多く、また天候不順による急遽の日程変更など、イレギュラーなことが盛りだくさんではありましたが、そんなことも吹き飛ばしてくれるくらい、生徒はエネルギーに楽しんでくれていたのではないのでしょうか。総合優勝はS3Aが勝ち取り、貫録を見せましたが、各種目ではS2、S1も頑張っていたと思います。

来年度は制限がなくなり、より“熱い”戦いとなることを願うばかりです。

## 総合

1位 S3A    2位 S3B    3位 S2A  
 ブービー S1B  
 (S体育部顧問)

## J 校内大会

2021年度J校内大会が7月12日におこなわれました。当初の予定では9日に実施される予定でしたが、気象警報が発令された為、12日の午後より実施しました。実施種目はドッジボール、卓球です。例年実施されているリレーは雨の為、中止となりました。

各クラス勝利を目指して楽しみながら競技に取り組んでおり、勝ち負けに関係なく試合終了後の笑顔がとても印象的な校内大会となりました。試合結果は以下の通りです。

ドッジボール a	ドッジボール b
優勝 J 2 C	優勝 J 3 C
2位 J 3 B	2位 J 3 B
3位 J 2 B	3位 J 3 A

卓球 a	卓球 b
優勝 J 3 B	優勝 J 3 C
優勝 J 3 C	2位 J 3 B
優勝 J 2 C	3位 J 1 C

※卓球 a は勝敗が並んだ為、3チーム優勝としました。

総合成績	ブービー賞
優勝 J 3 B	J 1 A    J 1 C
2位 J 3 C	
3位 J 2 A	

(J体育部顧問)

## リーダーシップトレーニングキャンプ

7月19日～21日の3日間、2年ぶりにリーダーシップトレーニングキャンプを行いました。

リーダーシップトレーニングキャンプとは、J2からS2の生徒50名が3日間のプログラムを通して、「リーダーシップとは何か」について考えを深める行事です。当初は朝来市にある山東自然の家に宿泊する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、宿泊は取りやめになり、毎日それぞれの自宅から中高部に通う形での実施となりました。生徒は4月から7月までの約3ヶ月間、会議を重ね、プログラム実施に向けて準備を進めました。感染症拡大防止の観点から、毎年恒例であった火おこしと食事作りはできませんでしたが、その分時間にゆとりが生まれ、ひとつひとつのプログラムにじっくり取り組むことができました。とりわけ、午後のミーティングの時間を十分確保することができたことは、参加者それぞれの考えや思いに耳を傾け、自らを見つめ直すよい機会となったようです。

なお、当日の参加者はJ2～S2の生徒50名と、引率教員5名でした。

(中高部教諭)

## 2021年度エンパワーメント・プログラム

7月19日～23日の5日間、エンパワーメント・プログラムを実施しました。生徒60名が10グループに分かれ、それぞれのグループに国内の大学に在学している留学生がリーダーとして1名ずつ付きましました。

講師のドネットさんの指導の下、生徒たちは5日間かけて最終日の個人プレゼンテーションへ向けてアクティビティ、スキット、ディスカッション、プレゼンテーションをおこないました。初めは恐る恐るだった生徒たちも、リーダーと様々なテーマ(ジェンダー平等、SDGs、自分らしさ)について話すうちに積極的に英語を話すようになっていました。最終日のプレゼンテーションでは生徒たちはみな堂々と話すことができ、これまで学んだ姿勢やジェスチャーなどを活用していました。初日の態度からは見違える発表になり、リーダーも生徒たちの成長をととても嬉しく思っていました。

本年度は新型コロナウイルス感染防止対策のため、接触や密になることをできるだけ避けたプログラムになりました。生徒たちは2年ぶりということを楽しみにしていたようで、皆意欲的に参加していました。海外からの大学生の招致はかありませんでしたが、アジア、アフリカ、中東圏からの留学生をお招きし、様々な国の文化や背景を生徒たちが知ることができたのも大きな収穫でした。

(中高部教諭)

## MLC-KC Online Exchange Program

夏休み中の数週間、私たちはオーストラリアの姉妹校との交流プログラムである、MLC-KC Online Exchange Program に参加しました。

MLC-KC Online Exchange Program はオーストラリアスタディツアーの代替措置で、同年代のネイティブとの対話を通して英語力やコミュニケーション能力の向上を目的としています。今回私たちは、ビデオ通話などを通じ現地の生徒たちと交流しました。

その一つが、MLC 生に私たちのことを知ってもらうためのグループに分かれた様々な種類のプレゼンテーション制作です。日本の文化や神戸女学院の案内など、皆で協力して準備するためとてもやりがいのある作業でした。夏休みの一日を使って日本の文化を伝えるために金閣寺と清水寺で取材旅行もおこないました。MLC 生に日本文化を紹介するビデオを撮影するため、グループで何度も話し合いをし、当日は晴天で綺麗に動画を撮影できました。その後、学校で編集作業をおこない、字幕を入れたり音声を入れたりするなど、日本の魅力を最大限に伝えるため様々な工夫をしました。当日発表する時は少し不安でしたが、何人かが質問をしてくれ、上手く伝えることができたようで良かったです。日本の魅力を再発見し、どうすればそれを上手く伝えられるのかを学べた良い経験となりました。

プレゼン後、学年ごとに割り振られた MLC 生の 2～3 人と神戸女学院生 2 人のグループでビデオ通話で 30 分ほど交流をおこないました。初めは緊張した雰囲気が漂っていましたが、それもだんだんと和み、お互いの文化を知れるとても有意義な楽しい時間でした。また、私たちの英語の練習としての会話の他に、MLC 生に私たちがネイティブとして日本語を教える時間があり、とても新鮮で、お互いに高めあうことができる素晴らしい時間となりました。

また、新たな試みの一つとして、ペアを作って各自の家から、より交流を深めるビデオ通話を繋ぐバーチャルホームステイというプログラムがありました。自分の学校や趣味の話、家族紹介やルームツアーをしたりと、さらに仲良くなることができました。

このプログラムを通じて、何かを伝えたい時、英語を完璧に話せることは重要ではないということを知りました。最初のグループディスカッションの時、正しい英語が話せなかったらどうしようと不安に思うあまり、言葉が出てきませんでした。しかし、MLC 生が気さくに話しかけてくれたことで少しずつ自分の考えを伝えられるようになりました。伝わるという安心感からさらに話は弾み、楽しく交流できました。今回は感染症の影響で実際に会って話したりすることはできませんでしたが、将来の話や、今の社会についての考え方など沢山の共通点や相違点を見つけることができました。(S1C 生)

オンラインでの交流とはなりませんが、MLC 生は皆楽しそうで、こちらも笑顔になることができました。初めは英語を詰まらずに話せるか不安で緊張もありましたが、最後のオンラインホームステイでは、お互いに好きなお菓子や動物について語るなど言葉の壁を越えて交流することができたと思います。コロナ禍で世界の国々との国際交流ができなくなっている今、このようなネイティブの人々独特の自信や親しみやすさ、明るさを知れたことは貴重な経験であり、また国際間の交流の大切さも知らされるものでした。(S1B 生)

今回私が学んだことは、失敗を恐れないことは言語の勉強だけに関わらずとても大切なことだということです。MLC 生の日本語レッスン時の彼女たちの、会話をしよう、伝えようとする姿勢に驚かされました。また、バーチャルホームステイでは私のつたない英語も一生懸命に汲み取ろうとしてくれました。よく言われることではありますが、会話をするうえで大切なのは「とにかく伝えようとする」こと、その意志だと思います。大変なことも失敗もありましたがとても有意義な経験となりました。

(S1B 生)

## 2021年度中高部文化祭

「来年こそは新型コロナウイルス感染症も終息し、例年通りの文化祭ができるだろう。」今年度の文企（文化祭企画実行委員会）のメンバー募集が始まった昨年の10月末の時点で、誰もがそう信じていました。

2021年には延期になっていたオリンピックも開催される方向で世間も動き、楽観視するムードもありました。しかし、コロナ感染者数は増減を繰り返し、事態は一向に改善しませんでした。そのため、通常プログラムでの開催への期待も持ちながら、一方で事態が改善されなかった場合の対策として、展示方法、舞台の観覧形式、誘導方法などについても並行して検討を重ね、準備を進めていました。

新型コロナ第3波、第4波が訪れ、完全に例年通りに一般公開することはできないことになりましたが、在校生の保護者と本校受験希望者とその保護者には来ていただける方向で準備を進め、夏休みは何か予定通り本番を迎えられることを祈る日々を過ごしました。

しかし、ラストスパートの2学期を目前に控えた夏休みの終わりに第5波が訪れ、8月20日から文化祭の直後の9月12日まで緊急事態宣言が発令されるということが決まりました。そのため、保護者・受験生に対する公開が中止となり、いくつものプログラムに変更が生じました。また、直前の準備、リハーサルで最も忙しくなるこの時期に、下校時刻は16:30、土曜日の活動は禁止となってしまいました。

私は正直なところ「よりによって何で今なの!?!」という気持ちを抱いてしまいましたが、誰も不平や不満を漏らすことなく、すぐに気持ちを切り替えて次に向けて行動を移していました。

このように、今年は度重なる試練が降り掛かってきましたが、そのような中にあっても、常に今できる範囲で最大のことができるように知恵を絞り、動いてくれた文企幹部・メンバー、文化部の生徒の皆さんの行動力の強さには感服させられました。また、その他の各クラブ、学年の生徒の皆さん、教職員の皆さんのご協力のおかげで本当に素晴らしい文化祭を行うことができました。

2日間とも校内用となり、他の方に見ていただく

ことができなかったのは残念ですが、プログラムとしてはかなり例年に近い形で行うことができました。一方、直前まで変更が加わることを予想して、パンフレットの別冊を作成したり、一般公開向けのジョガコレや探究発表のスピーチが中止となったことから、全校特別企画「コロナとココロ」で、コロナを乗り越えてこれからの希望を記す場を設けたり、といった今年ならではの工夫も見られました。

今年は顧問という立場で文化祭を作り上げている生徒の皆さんをそばで見させていただき、サポートさせていただくことができましたが、皆さんの不転の思い、実行力の強さ、仲間を思いやる優しさ、友情の深さに触れ、感動の連続の日々でした。

異例なこと尽くしの中、文化祭の実現に向けて様々な場面で本当に多くの方に助けていただきました。皆さんの協力なしではこのように素晴らしい文化祭は到底成しえませんでした。文化祭に携わっていただいたすべての方に心から感謝いたします。

(2021年度文化祭企画実行委員会顧問)

## J1秋の遠足

J1は例年と同じく、徳島県の鳴門市にある大塚国際美術館と大鳴門橋の下の遊歩道である「渦の道」を見学しました。行き帰りともバスの車内では新型コロナウイルス感染症予防のためお菓子は禁止、レクリエーションも禁止、と楽しみが減りましたが、映画のDVDの他、鳴門にスポットを当てた回の「プラタモリ」のDVDを鑑賞し、鳴門の歴史や地形について学びを深めることができました。

大塚国際美術館は緊急事態宣言が明けた気候の良い週末だったこともあり、何校かの学校の団体や多くの観光客で賑わっていました。生徒達は探究の授業の一貫でこの美術館の絵画を調べ、調べたことをグループごとに新聞にまとめるという作業を行うことになっていたため、みな真剣に世界の名画に見入っていました。館内には名画の顔はめパネルも用意されており、そこから顔をのぞかせ、なりきって写真を撮影している生徒もいました。

鳴門の名産品の詰まった昼食をいただいた後は写真撮影をして「渦の道」を渡りました。床がガラス張りになっているところでは、歓声をあげて床を踏みならす生徒や恐る恐るゆっくり通り過ぎる生徒など、さまざまな反応が見られました。お天気も良く遠くまで視界も開けていましたし、足下の渦もよく見え、まさに絶好の遠足日和でした。

引率は8名でした。

(J1B担任)

## J2秋の遠足

10月8日、西宮北口に集合し、最初にバスで六甲山の再度公園に向かい、外国人墓地内にあるタルカット先生の墓参をおこないました。例年墓参はJ1の春の遠足の際におこなっていますが、コロナ禍に伴い2年連続で春の遠足が中止になった為、今回の遠足のコースに組み入れました。その後、淡路島に渡り、北淡震災記念公園で講演会を聴き、昼食後班ごとに野島断層保存館、震災体験館を見学しました。講演会では震災当日とその後のライフラインが絶たれた生活、この地域における大震災を想定していなかったことへの反省、日ごろの防災意識を高め自分の命を守ることの大切さを伺いました。野島断層の一部も展示されており、生徒たちは、事前に9月に放映された「プラタモリ—神はなぜ淡路島を始まりの島にした!?!」を視聴し、興味深い見学の時間となりました。マグニチュード7.3の激しい揺れを体験するコーナーもあり、地震の恐ろしさを想像する貴重な機会となりました。その後、パルシェ香りの館でローズヒップのハーブ石鹸作りを体験し、あわじ花さじきで美しい景色を堪能したり、お土産選びを楽しむなど、思い思いに過ごし、帰路につきました。「花さじき」出発時間の遅れと交通渋滞のため、定刻通りの解散とはなりませんでしたが、晴天に恵まれ、親睦と学びの充実したひと時となりました。出席140名、欠席1名、引率は7名でした。

(J2学年主任)

### J3小旅行報告

今年は感染症の影響で県内開催となった小旅行。本来の予定地であった北陸より充実した素敵な旅にしようという担任団の意気込みのもと計画した2泊3日でしたが、いかがだったでしょうか。

神鍋ブルーリッジホテルに泊まり城崎を楽しむ初日2日目のプランでは、お目当ての温泉やデザートのお店が休業続きの中、へこたれずにアイスを食べ、コロッセを頬張り、ロープウェイに乗り込む生徒たちの姿に、漲る食欲とたくましさを感じました。途中で修学旅行中のS2一行と鉢合わせするハプニングもありましたが、それぞれに玄武洞やマリワールドを満喫し、お土産を選んで、いざ南へ。出石での昼食ではセットされた皿そばの枚数の少なさを嘆きつつ、淡路島の高級ホテルであるグランドニッコーに到着、フルコースの夕食に緊張のあまりか静まりかえりましたが、ある人は賑やかに、ある人はしみじみ静かに語り合っただけ最後の夜を過ごしたようです。

今回の小旅行実施に尽力してくださったすべての方に感謝して報告といたします。なお、引率は6名でした。

(J3学年主任)

### S1一泊研修

高等学部1年生の一泊研修旅行は、「探究学習」の一環として設定しています。探究学習は、教科などの枠を超え、物事を多角的・複合的に捉えて、思考を広げ深めることを目標としており、この点に重きを置いてコースを組みました。学びの質を高めるために、映像資料による事前学習もおこないました。

10月7日、8日とも晴天に恵まれ、元気に楽しく過ごすことができました。最初に訪れた植村直己冒険記念館では、植村さんの挑戦の歴史や名言、装備品などの展示を見学し、植村さんの生き方やお人柄を知ることができました。強い日差しを受けながらの神鍋山ハイキングは少し大変だったようですが、近畿で最も新しい火山の噴火口や地層断面を見ることができました。また、至る所でスコリア（火口から噴出した多孔質の礫）を観察することができました。宿泊先では夕食後に、有志によるダンスやバンドの動画を楽しみ、希望者は星空観察も満喫しました。2日目は、コウノトリの郷公園にてコウノトリを観察し、コウノトリの野生復帰を軸にした地域生態系の再生と地域づくりについての解説を伺いました。玄武洞公園では、玄武岩の石柱の迫力に圧倒され、感嘆の声が聞こえてきました。最後に訪れた出石では昼食にお蕎麦などをいただいた後に、城下町の町並みを散策し、この研修旅行を締めくくりました。出席140名、欠席8名、引率教員は5名でした。

(S1C担任)

## S2 修学旅行報告

S2は10月4日～7日の3泊4日で兵庫県内旅行に行っていました。参加生徒は138名、付き添い教員7名、看護師1名、名鉄観光から添乗員3名でした。

1日目は班別の淡路自主研修として、3つのコースに分かれて集合時間をずらして出発しました。それぞれ「じゃのひれアウトドアリゾート」、「ニジゲンノモリ」、「ウェルネスパーク五色」がメインコースですが、「道の駅うずしお」での昼食と「うずしおクルーズ」は共通のプログラムとして、こちらも時間をずらして行いました。その後、「グランドニッコー淡路」に集合し、宿泊しました。

2日目は学年全体での観光として、午前中は竹田城で城址見学をしました。その後、出石に移動して自由散策をし、連泊する姫路の「夢乃井」に到着後は温泉を楽しみました。

3日目は、班別の城崎自主研修として、「城崎マリンワールド」、「城崎温泉街と玄武洞公園・玄武洞ミュージアム」の2つのコースに分かれておこないました。「夢乃井」に戻ってからは、夕食後にレクリエーションをおこないました。録画ビデオ鑑賞の形式で行い、感染症対策をおこないつつも、楽しく大いに盛り上がることができました。

最終日は学年全体での観光として、午前中は生野銀山で坑道、資料館を見学しました。その後、「ユニトピアささやま」で修学旅行の解団式を行い、昼食。午後は、丹波篠山へ向かい自由散策をし、その後、帰路につきました。

この修学旅行が、生徒たちの豊かな交わりと学びの時となるだけでなく、最高学年に向けての自覚と成長を育む時となりましたことを、報告申し上げます。

(S2B担任)

## S3 秋の遠足

今年度の遠足は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、県内での遠足地を模索することから始まりました。様々な候補地の中から行き先を有馬温泉といたしました。生徒たちの中では「県内なら有馬へ」という期待もあったようで、遠足地を発表した時には歓声があがる程でした。

当日は出席者128名（欠席者8名）、引率教員5名でした。

今回はバスを使わず、各自で現地に向かう形をとりました。生徒たちは10時過ぎから有馬温泉駅に集合し始め、10時40分にねね橋の下で学年写真を撮影した後、自由散策の時間をとりました。昼食会場である向陽閣での入浴を希望する者は、食前と食後に分かれて温泉を楽しんでいました。

12時25分に再集合し、共に礼拝を守り、昼食を楽しみました。こうした賑やかな行事の際にも礼拝のひとつを大切にしている生徒たちの姿を頼もしく感じました。

食事会場は350人を収容できる和室を提供していただいたので、感染予防対策としては十分な間隔をとって着席することができました。

昼食を楽しんだ後、13時45分頃から各クラスでの集合写真を撮影し、自由散策、現地解散となりました。

S3の生徒たちはコロナ禍の学校行事を立派につくりあげながら、学習面においてもそれぞれの目標に向かって努力の日々を重ねてきました。楽しそうな遠足での様子を見てみると、心身共にリフレッシュし、友情を深めることができたと感じています。

(S3B担任)

### 芸術鑑賞会（9月16日アミティホール）

昨年度の中高部芸術鑑賞会は、校内でのリモートによる実施でした。今年度は何としてでも生の舞台を鑑賞してほしいという思いで計画を始めました。

劇団「風」は以前「ヘレン・ケラー」を鑑賞し、力あるパフォーマンスに圧倒されたという感想を多く耳にしていたこともあり、今回再びお願いしました。コロナ禍の観劇ということで座席の間隔をあげ、J・S別の2回公演としました。その劇場空間の隙間を埋めるべく、演者及びスタッフの皆さんの迫力ある演技と演出に午前のS生徒、午後のJ生徒共に、大いに魅了されました。演目は『Touch～孤独から愛へ』。孤児の兄弟と謎の紳士が寄り添い、心を通わせていく物語です。紳士ハロルドが2人の孤児、不良の兄トリートとアレルギー体質の弟フィリップの肩に手を置く場面が何度も登場します。まさにタイトルの「Touch」によるぬくもり、安らぎによって、閉ざされた心が解放されていくのです。現在私たちはマスクごしに他者を見つめ、Jの1年生及び2年生は入学してから互いの生の表情に触れたことがありません。ソーシャルディスタンスが叫ばれ、握手もひじやこぶしで行い、食事も同じ方向を見ながら黙食です。こうした異常な状況だからこそ、この作品に込められたメッセージを伝えたいと考えました。

劇団には緊急事態宣言下のため設営・準備の時間も大幅に制限された中、撤収時の舞台見学やJ演劇研究部生徒との座談会まで協力いただき、深く感謝申し上げます。

(中高部教諭)

### 2021年度中高部キャンパス見学会

中高部キャンパス見学会は、新型コロナウイルス感染症流行前の2019年度までは、原則、事前申し込みなしで自由に学校を見学いただける機会としていました。今年度は、密を避け、適切な距離を保つために、事前申し込み制で1家庭につき1組2名（保護者とお嬢様）の入場制限を設けた上で実施しました。事前申し込みの結果、予想以上の申し込みがあったために、当初予定していた11月6日に加えて、11月23日にも同内容のキャンパス見学会を実施しました。

来校いただいた皆様には、まず講堂にて中高部チャプレンによる司式のもと、ともに礼拝を守っていただき、中高部長からの教育方針説明、続けて学校生活の様子を紹介したビデオ閲覧の流れでお過ごしいただきました。その後、20名程度の小グループに分かれて、キャンパスツアーを実施しました。ツアーでは、中高部の葆光館、タルカット館、アンジークルー館、コムホール、ヴァージニアクラークソン館、第2体育館などを見学していただきました。最後は、大学の中庭、シェイクスピアガーデンまでご案内してツアーを終了し、全体として60～90分のプログラムで実施しました。

来校いただいた上で学校の様子をご紹介する機会を設定することが難しい中、2日間のキャンパス見学会が実施できましたことに感謝いたします。来校者数は11月6日は372組、11月23日は342組でした。

(校務課長)

## &lt;課外活動紹介&gt;

[クラブ]

**J軽音楽部**

部長

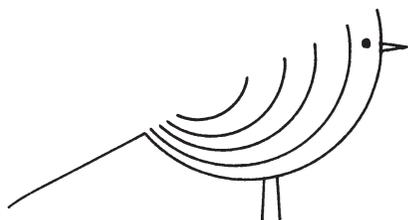
私たち軽音楽部はこの一年間コロナ禍もあり、舞台はもみの木の集い、J1 歓迎会、文化祭をおこないました。舞台毎の演奏曲は各メンバーから希望曲を集め投票をし、自分の弾きたい曲に立候補します。クラブノートも全員が感想を書くようにし、全体のやる気が起こるような取り組みをしています。リハーサルでは反省会を行い、音量などについて学年関係なく発言する機会も設けています。また、先生や先輩方に助けていただきながら一同切磋琢磨し、この先に向けて一生懸命努力していこうと思います。

[クラブ]

**J文芸部**

J文芸部は、創作を通じて部員同士の交流を深め、想像力を豊かにすることを目指して活動しています。愛校バザー・文化祭・キャンパス見学会などでの冊子の発行を行い、表紙絵も部員が担当し個性的な絵で表紙を飾っています。COVID-19の影響で昨年、今年と実施できていませんが、夏期休暇中には近畿近郊の名所を訪れ、日常とは異なる環境で創作の刺激を得ています。週に2回、火曜日と金曜日にHRで活動し、連想ゲームや絵しりとり、リレー小説作成などを行い、ほかの時間は各自の創作活動になります。

(J文芸部顧問)



[クラブ]

**S 写真部**

この2年間は、写真部の重要な撮影機会であった学内イベントや夏の合宿が新型コロナウイルス感染症の影響で行えなくなり、生徒たちは活動にとっても苦労しました。数少ない撮影機会である校内大会や体育祭、文化祭では、クラスや総部、兼部している他のクラブの活動の合間を縫って、頑張って撮影をしました。部員たちは、公式のクラブ活動として撮影をする機会にはクラブのパーカーを着用しています。全学のイベントが復活した暁には、このパーカーを着て撮影している生徒を見かけたら温かい目で見守ってやってください。

(S写真部顧問)

[クラブ] **SESSでの大切な日々**

部長

舞台は誰か1人でも欠けると成立しません。コロナ禍で非日常が日常となり、思うように練習ができず、直前まで無事に本番を迎えられるのかさえ分からない中、より良い舞台を目指して皆で意見を出し合い、1人1人がそれぞれの役割を担いながら全力で練習に取り組み、皆が納得できる舞台を最後にS2は引退となりました。今は無事にやり切れたという安堵と引退した寂しさでいっぱいです。支えてくださった顧問の先生方や頼りになる部員と過ごした日々は大切な宝物です。今後も、どんな状況下であってもより良い舞台を目指して努力するSESSであり続けることを願いつつ、バトンの後輩に託したいと思います。



## 〈学院日誌〉

8月1日(日)	オープンキャンパス	10月23日(土)	愛校バザー(中止)
8月30日(月) ～10月8日(金)	新型コロナウイルスワクチン職域 接種	10月27日(水)	中高部教員会議 理事会
9月1日(水)	中高部教員会議	11月6日(土)	中高部キャンパス見学会①
9月10日(金)	中高部文化祭①	11月17日(水)	中高部教員会議
9月11日(土)	中高部文化祭②	11月19日(金)	教授会
9月15日(水)	中高部教員会議	11月23日(火・祝)	中高部キャンパス見学会②
9月20日(月・祝)	オープンキャンパス	11月24日(水)	理事会
9月22日(水)	理事会	11月26日(金)	合否判定教授会
9月28日(火) ～10月11日(月)	中学部入試説明会	12月1日(水)	中高部教員会議
9月29日(水)	中高部教員会議	12月3日(金)	合否判定教授会
10月4日(月)～7日(木)	高等学部修学旅行	12月12日(日)	オープンキャンパス
10月6日(水)～8日(金)	中学部小旅行	12月17日(金)	教授会 中高部教員会議
10月13日(水)	中高部教員会議	12月22日(水)	理事会
10月15日(金)	合否判定教授会 教授会		

## 目

私たちに希望はある……………	1
KCC だより……………	3
2021年度愛校バザーの中止について……………	5
新型コロナワクチン職域接種実施について……………	5
「定期寄付」を開始しました……………	6
宗教強調週間 プログラム報告……………	6
留学報告……………	11
史料室の窓・女学院生は歌がお好き……………	12
事務室探訪……………	13
大学報告	
OAFF『竹で稼ぐ男たち』学内上映会……………	14
日本環境毒性学会研究発表会に参加して……………	14
プロジェクト科目：モリシャス海洋汚染事故……………	15
オンライン国際交流サマープログラム(日越大学)報告……………	15
音楽学科の取り組み……………	16
2021年夏のシステムリプレース……………	17
本学のPCIT 研究論文が日本遊戯療法学会奨励賞を受賞!……………	17
八木澤教司専任講師作曲作品が 東京2020パラリンピック開会式で使用されました……………	18
夏期語学研修報告……………	18
オンライン国際交流サマープログラム報告……………	20
音楽学部夏期講習会報告……………	20
夏期インターンシップ実施報告……………	21
インターンシップ参加報告……………	21

## 次

秋季大学教授会研修会……………	22
2021年度岡田山祭……………	22
私の研究……………	23
中高部報告	
第37回成田山全国競書大会 読売賞……………	24
国際音楽コンクール受賞のご報告……………	24
2021年度中高部教職員研修会……………	25
S 校内大会……………	26
J 校内大会……………	26
リーダーシップトレーニングキャンプ……………	27
2021年度エンパワーメント・プログラム……………	27
MLC-KC Online Exchange Program……………	28
2021年度中高部文化祭……………	29
J 1 秋の遠足……………	30
J 2 秋の遠足……………	30
J 3 小旅行報告……………	31
S 1 一泊研修……………	31
S 2 修学旅行報告……………	32
S 3 秋の遠足……………	32
芸術鑑賞会……………	33
2021年度中高部キャンパス見学会……………	33
課外活動紹介……………	34
学院日誌……………	36

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。